



松山商事(株) 松山社長（左側）から、当時の新聞記事等について説明を受ける
帯広信金 中村常務（右側）



保存していた『きよ泉』の瓶を紹介する 石川商店 石川代表（左写真）
保存していた『きよ泉』の一升瓶（石川氏資料提供）（中央写真）
当時撮影した『きよ泉』（松山氏資料提供）（右写真）



当時の新聞記事等（松山氏提供資料）



当時撮影した松山酒造(株)製造清酒の写真（松山氏提供資料）

北海道酒業史編纂断片

記録

17

創業の人物……

…… 伍長勤務上等兵

▼十勝清水町にある松山酒造Kの創業は大正11年で、創業者は現社長松山護氏の父、故金次郎である。明治25年京都府下（現在は市域）に生れ、小学校（当時四年制）を卒えると漢学の私塾に通って勉強したが、ここで薰化された思想や信念が氏自身にばかりでなく一家の運命に大きい影響を興えたように思われる。忠君愛国熱情に厚く、大正2年京都第38連隊では連隊第一の成績で伍長勤務上等兵を拜命したが、当時としては、現役兵で伍勤となることは至難で、かつ稀有の例であったと云われ

る。▼金次郎氏が清水町に来住したのは大正4年ごろで、海産物や雑穀の仲買業を営んだが、勤勉誠実、たちまちにして財を成した。町民の要望もあって酒造業

をはじめめることになったのであるが、とくに親交のあった材木業の及川重次郎が最も熱心に勧誘し、かつ建設に協力してくれたとい

う。ちなみに当時は三百石以上の規模でなければ許可が出なかったと云われる。創業から日本酒と共に焼酎も製造したようである。

…… 土地三町歩を寄付

▼金次郎氏が世中に、どのような酒業経営をしてきたかという記録は、いまのところ後記の一文書以外に全く見当たらない。氏の人柄は事業家とか政治家といった鋭角的な型ではなく、むしろ、温かな徳望家として民に敬愛されていた。納税協力会、また昭和17年には清水中学（現高校）の建設に奔走し、自ら土地三町三段歩を寄附するなどの功があった。なお、十勝酒造組合長を勤めたこともあることを失記してはなるまい。

を始めることになったのであるが、とくに親交のあった材木業の及川重次郎が最も熱心に勧誘し、かつ建設に協力してくれたとい

国民精神總動員推進会、国民貯蓄会、警防団、消防団、男女各青年団、尚武会、防空協会など幾多の社会団体に参加して、中核し首長として公共に尽くすことと甚大であった。

終戦期の企業整備と金次郎氏の急逝

清水 松山酒造K・K草史（上）

▼松山家にいまも残存している古い文書の一つに、税務署の覚え書きとも思われる「清酒企業整備ニヨリ決定事項」というのがある。当時の事情を知る上に貴重な文獻であると思われるので、ここに本文を採録しておきたい。

1 金四七、二八〇円
醸造実績共助金：石六〇円 共助方法：連合会ヲ経テ更生金庫ヨリ
昭和一九年七月ヨ



若くして急逝した初代松山金次郎氏

リ一月金五二九円二〇銭
「一万円ニ対シテ月一五〇円也」
2 譲渡ヲ受ケタル醸造石数 イ清酒七八八石
3 譲受タル石数と氏名 四〇三石：滝川町
広部伊織 二二五石：増毛町青木五郎 一八

六石：羽幌町藤見合名会社
計八一四石 右
ノ内ヲ帯広市小川ツタニ



昭和初期の漆塗の看板

一切全然口にしない人で、したがって夫人は事業のことが皆白わからないで、ませることとはできなないので、いかに勉強を開始せねばならなかつた。イサ夫大

如して急逝してしまつた。病因は急性肺炎であつた。酒造権石当り……酒米米四俵分

▼金次郎氏の急逝によつて松山家が困難に逢着したことは云うまでもない、時あたかも終戦の年である上に、長子護氏はまだ若く海軍兵学校に入学中であるから、夫人のイサさんが大閉口してしまつた。大閉口の理由はさらにもう一つあつた。なぜなら、亡夫金次郎氏は家庭では商売のことを

栄枯盛衰

十勝の産業史



「名門酒造株式会社」の初出荷。右から2人目が山本さん

④

山本 一雄さん(82)
芽室商工会会長、芽室町西一条四丁目
造り酒屋

左党連のオールドフアンに
とって「若狭の鶴」や「
泉」長寿」の地酒銘柄名を聞
けば、ある種の感動さえ覚え
るに違いない。明治時代から
賑々と受け継がれた十勝の造
り酒屋の歴史は、五十五年を
振り返りつづけた。

はぐまれて出来た酒は、実
にうまかった」と山本さんは
当時を振り返る。
昭和十八年、戦時企業整備
令によって、山本酒造は廃止
の運命に。戦後の二十三年、
酒造は解散され、原料の配給
を受けながら、細々と復活。

二年八月に三軒の酒造が販売
回で手を結んだ。
これに参加したのは小川銘
醸(帯広)、松山酒造(清水)
で、帯広市東一街二十五にビ
ン詰め工場を設け、名門酒造
株式会社とした。現在の帯広
の繁華街の代表格(名門通り)
は、同社の銘柄名を採用した



懐かしの地酒銘柄

昭和55年を境に姿消す

四十三年に造り酒屋を興し、
一時は千石(百八十キ)を
製造していた。岩手県から社
氏(とく)を招き、原料米
は兵庫、岡山の二級品。十勝
のうまい水と、厳しい風土に

銘柄の長寿、千代正宗を持つ
て十勝管内はもとより根室、
富良野方面にまで営業であ
た。しかし、所せんは経営基
盤の底の浅さといおうか、販
売面の狭さが指摘され、三十

とされる。初代社長は小川晃
氏、専務に松山藤氏、常務に
山本氏が就任した。のちに山
本氏が社長となり、三十八年
には「北の鶴」に社名変更し
た。

の事となり、四十一年には小
川銘醸を皮切りに、五十四年
帯広酒造合資会社(藤野善次
社長)、五十五年には松山酒造が
相次ぎ廃止への道歩んだ。
山本さんも五十四年十一

ぜ十勝で造り酒屋が生き延び
ることができなかつたかをし
つくりきえやう、本州府県と
違つて伝統のなさと、郷土に
対する愛着の姿勢はないだろ
うか。最近、ローカルブラン

しかし、四十年代前半から
は酒造の需要はウイスキー、
ビールにシフト侵食され、
造り酒屋の経営は、どうも火
れといえはそれまでだが、な

下の見直しで地酒の良さが再
認識されているが、その時に
なつて地酒の企業がすべて姿
を消しているのは寂しいこと
です」と山本さんは大きくた
め息をつく。

△定跡V十勝管内の造り酒
屋の歴史は、明治の開拓の時
を同じくして栄えた。大正時
代には、新得、広尾、本別、
止若(現幕別)、清水、芽室、
帯広に九軒の酒造が免許を受
けていた。その後の難戦景気
などで繁栄したが、第二次世
界大戦でほとんどの酒造は廃
止され、戦後、復活したもの
の経済的な底の浅さから統合
などが進んだ。

また北海道酒造協同組合の
調べによると、全道の造り酒
屋の数は大正時代から戦前に
かけて二百軒を数え、現在は
ナショナルブランドを含めて
約五十社にとどまっている。
現在、帯広・十勝では、日
本酒造(本社・札幌)の帯広
工場(帯広町札内)が唯一、
操業している。

洋食の世界